（２）教職員の共通理解に基づく組織的・計画的な取組

－「計画的な」取組の必要性－

生徒指導上の問題が起きた場合に、速やかに適切な対応が行われる必要があることは言うまでもありません。ただし、問題によっては、事後の対応では取り返しのつかないこともあり、起きてから対応するという考え方から、問題が起きにくい学校風土を作る、問題を回避できる児童生徒に育てる等の予防的な考え方、つまり未然防止の考え方へと軸足を移していくことが求められるようになっています。そして、未然防止の基本は、すべての児童生徒が安心・安全に学校生活を送ることができ、規律正しい態度で授業や行事に主体的に参加・活躍できる学校づくりを、「居場所づくり」や「絆づくり」をキーワードとして進めていくこと*1です。

しかしながら、いざ学校で未然防止に取り組むとなると、次のような困難が伴います。

一つは、今、起きている事象と比べ、起きていない事象の場合には、教職員が危機感を感じにくく、後回しになりがちであるという点です。教職員は、眼前に起きた問題を放置しておくわけにはいきませんから、まず、その対応を行います。その対応期間中に、他の問題事象が「目に見えにくい」かたちで進行していても、まだ問題が起きていなければ、課題発見の試み等の未然防止の取組は後回しになるということも起こりがちです。

二つめは、既に起きた事象への対応と比べ、起きていない事象への取組の場合には、教職員が成果を実感しにくく、取組を中断しがちであるという点です。問題事象の事後対応の場合は、問題が解消していくことにより、取組の手応えをリアルタイムで感じることができます。ところが、未然防止の取組の場合には、本当ならば起きていたはずの問題事象が起きなくて済んだというかたちにしかならないため、ある程度の期間が経った後でしか成果や手応えを感じられないこともあり、取組が低調になったり、持続できなくなることもあります。

このように、未然防止の取組は、後回しになりがちで中断しがちな取組です。これを実施し継続していくためには、取組をあらかじめ「計画」しておくことが必要なのです。

－「P.E.A.C.E.（ピース）　メソッド」について－

未然防止の取組を積極的に進めるには、児童生徒の未だ表には現れていない課題を発見する試みと、そこで明らかになった課題を解決していくための計画的な取組が重要になってきます。そうした計画的な取組を進める手法として、国立教育政策研究所が開発・提案してきた「P.E.A.C.E.メソッド」があります。

「P.E.A.C.E.メソッド」とは、オーストラリア生まれのいじめ対策法である「P.E.A.C.E. Pack」を参考に、教職員全体で組織的・計画的に生徒指導に取り組むことができるよう、国立教育政策研究所が開発・提案してきた手法（メソッド）です。

① Ｐ＝準備（Preparation）

児童生徒の現状を質問紙調査や欠席・遅刻・早退の日数等（客観的に測定でき、繰り返し実施可能かつ比較可能な尺度）で把握し、課題を発見する。

＊１　国立教育政策研究所の『生徒指導リーフ２「絆づくり」と「居場所づくり」』『生徒指導リーフ８いじめの未然防止Ⅰ』『生徒指導リーフ９いじめの未然防止Ⅱ』を参考にしてください。

② Ｅ＝教育（Education）

その課題（問題となる状況）をどう変えたいかという目標（１年後・半年後・学期の終了時等までに実現したい状況）を設定する。

③ Ａ＝計画策定（Action Planning）

その目標を達成するための具体的な取組について、計画（自校の教育課程に位置付けた実施計画）を策定する。

④ Ｃ＝対処（Coping）

実施計画に沿って、一連の取組を着実に実施する。

⑤ Ｅ＝評価（Evaluation、これが次のサイクルのＰ＝準備に相当）

期間終了後に、目標の達成状況を把握（上記の①で用いた尺度によって変化を確認）し、上記①～④の課題発見・目標設定・計画策定・取組実施のそれぞれについての適否を検証する。検証の結果から導かれた新たな課題を上記の①とする。（引き続き②～⑤を実施していく。）

－計画的な未然防止の取組に向けて－

各学校において、「P.E.A.C.E.メソッド」等を踏まえて、計画的な未然防止の取組を進めることができるよう、15～17ページに「P.E.A.C.E.メソッド取組例」を掲載しています。各学校の実態等に応じて、これまでの取組を見直し、この「取組例」も参考に、本書掲載の学習プログラムや資料の事例等を取り入れるなど、効果的な未然防止の取組を進めてください。

●「PDCAサイクル」とは、何が違うの？●

「PDCAサイクル」とは、計画（Plan）、実行（Do）、点検・評価（Check）、改善（Act）の順で経営管理を進めていく手法で、名称はその頭文字に由来しています。もともとは、経営学の領域における手法として登場し、教育の分野では学校経営学の領域で広く知られています。

「P.E.A.C.E.メソッド」は、PDCAサイクルと比べ、計画に先立つ部分をよりていねいに行う点に特長があります。すなわち、①Ｐ段階で現状把握のための実態調査を行うこと、②その調査結果に基づいて、Ｅ段階で教職員全員が参加する話合いを持つこと、③その中でＡ段階の目標設定や計画立案が行われることが、PDCAサイクルとは大きく異なる点です。

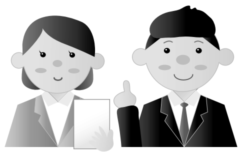
詳しくはこちら!

「問題事象の未然防止に向けた生徒指導の取り組み方」

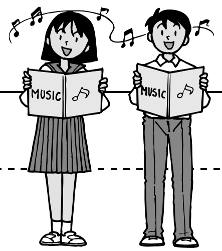
（国立教育政策研究所生徒指導研究センター　平成22年６月）

http://www.nier.go.jp/shido/centerhp/shienshiryou2/2.pdf

P.E.A.C.E.メソッド取組例　中学校第２学年

月		P.E.A.C.E.メソッド	取　組　例		
３月以前 春季休業前	①	自校の児童生徒の課題となる事象について、**基礎的な資料**を**収集**する。	■**基礎的な情報（児童生徒の出欠席日数、暴力等の発生状況、面接記録等）の収集**	P	第１サイクル
	②	児童生徒の実態を把握するため、**質問紙調査**を実施する。	■**質問紙調査実施（１回目）** ○「問題事象の未然防止に向けた生徒指導の取り組み方」18～21ページ「質問紙（調査項目）の例と解説」参考 （国立教育政策研究所生徒指導研究センター）		
春季休業中～４月初め	③	前年度の「３月前後」に実施した**調査結果**に基づいて**話合い**を行い、**学年ごとの重点課題**を明らかにする。 **取組を実施する教員全員が、学年担当者等の小グループで話し合い、共通認識を持つこと。**	■**調査結果** ○質問紙調査の結果が気になる項目、結果から見て大切にしたい項目等を取り上げる。 **質問紙調査結果（例）** ○自分のしたことで、友だちから悪口を言われた……やや多い ○仲間はずれにされたり、無視されたり、かげで悪口を言われたりした……やや多い ○私（私たち）のしたことで、ほかの人から感謝された……かなり少ない ○私（私たち）のしたことが、ほかの人の役に立った……かなり少ない ■**学年団全員での話合い** 「いじめの被害経験が予想していたより多い。対応方法を考えよう。」 「自己有用感を高める経験の少ない生徒が多いのが気になるね。」 「生徒の「自己有用感」が高まれば、いじめに向かわないという実践報告がある。まずは、「自己有用感」を高める取組をしてみよう。」 **重点課題：自己有用感の獲得が必要**	E	
	④	各学年で設定した重点課題を踏まえ、**学校教育目標**、**学年教育目標**を設定する。	**学校教育目標：認め合い、支え合うことができる生徒の育成** **学年教育目標：進んで仕事を見付け、協力して活動できる生徒の育成** **温かく思いやりのある人間関係がつくれる生徒の育成**		
	⑤	予定されている年間計画の中から、学校教育目標、学年教育目標の達成に生かせそうな行事や学習等の教育活動を**重点活動として選ぶ**。 **○児童生徒にどのような働きかけ（声かけや指導）を行うかまでをイメージしたうえで選ぶ。** **○適切な活動がない場合は、新たに始めることも必要。**	■**重点活動の選定** 「家庭科で、保育園交流を予定しています。この活動も生かせるのでは？　他の教科では？」 「５月の宿泊研修では、例年一人一役任されているよね。これを、自己有用感を高める取組になるように工夫してみよう。」 「自己有用感を高めるために、11月の学級活動の時間にグループ活動を実施してみましょう。」 「委員会・係活動をもう少し活性化させてみよう。生徒が主体的に取り組めるよう工夫したり、活動内容を報告したりする場を設けたりしよう。」 「10月の文化祭では、クラス劇の発表をする予定ね。それぞれの役割を果たして協力することが必要になるから、自己有用感を高める取組になると思うわ。」  「12月の人権週間で集会を行う予定だけど、生徒がもっと主体的に取り組めるような工夫をしたらどうかな？」	A	

時期		内容	具体的な取組		
	⑥	教師のみの共通理解や目標にとどめることなく、児童生徒や保護者、地域の人々も主体的に取り組めるよう、**スローガン**を作成することが望ましい。	スローガン：認め合い、助け合い、互いに「ありがとう」と伝えよう	A	第1サイクル
4月～7月	⑦	計画に従って**実践**を行う。	**■実践** 4～7月 各教科等での取組 5月 宿泊研修 「一人一役活動」 班内で、よくできていた点を中心に相互評価をする。 6～7月 委員会・係活動 「ありがとう！きびだんご」 各委員会の活動に積極的に協力してくれたクラスメートに、委員がコメントを記入した「きびだんごカード」を配る。カードは教室に掲示。	C	第1サイクル
	⑧	重点活動については、指導案や指導記録、児童生徒等の感想文等を**収集**しておく。	**■評価のための補助資料の収集** ・指導案　・指導記録　・振り返りシート　・感想文　・班活動の記録　等	C	第1サイクル
7月 夏季休業前	⑨	「３月前後」に実施したものと**同じ（相当の）調査票を用いた調査**を実施する。	**■質問紙調査実施（２回目）**	E(＝P)	
夏季休業中	⑩	「７月」に実施した**調査結果**に基づき、学年ごとの４～７月の取組を**検討・評価**する。	**■検討・評価** ○目標が達成できた場合には、別の目標にすることも考えられる。達成できなかった場合には、その原因（課題設定、目標作成、重点活動の選択、実践の在り方等の適否）を検討する。 ○「問題事象の未然防止に向けた生徒指導の取り組み方」22～23ページ「チェック・シートの例」参考 **■調査結果** ・１回目の調査結果と比較しつつ、重点課題となった項目の変容を中心に検討を行う。 **質問紙調査結果（例）** ○自分のしたことで、友だちから悪口を言われた……変化なし ○仲間はずれにされたり、無視されたり、かげで悪口を言われたりした……やや増加 ○私（私たち）のしたことで、ほかの人から感謝された……やや増加 ○私（私たち）のしたことが、ほかの人の役に立った……変化なし **■補助資料** ・指導案　・指導記録　・振り返りシート　・感想文　・班活動の記録　等	E	第2サイクル
	⑪	９月以降の**課題・目標・計画**を、必要に応じて**修正**する。	**■（必要に応じて）課題・目標・計画の修正** 「感謝された」の項目が増加している。生徒の感想文や振り返りシートにも同様の内容が見られる。 「役に立った」の項目には、変化が見られないね。なぜだろう。 いじめの被害経験が少し増えている。やはり、いじめ防止の取組も始めるべきでは？	A	第2サイクル

9月～12月	⑫	修正された計画に従って**実践**を行う。	■実践	C	
	⑬	重点活動については、指導案や指導記録、児童生徒等の感想を**収集**しておく。	■評価のための補助資料の収集 実践 評価のための資料収集 		
12月 冬季休業前	⑭	「３月前後」「７月」に実施したものと**同じ（相当の）調査票を用いた調査**を実施する。	■質問紙調査実施（３回目）	E（＝P）	
冬季休業中	⑮	「12月」に実施した**調査結果**に基づき、学年ごとの９～12月の取組を**検討・評価**する。	■検討・評価 ■調査結果 ■補助資料 	E	第３サイクル
	⑯	１月以降の**課題・目標・計画**を、必要に応じて**修正**する。	■（必要に応じて）課題・目標・計画の修正	A	
1月～3月	⑰	修正された計画に従って**実践**を行う。	■実践 	C	
	⑱	重点活動については、指導案や指導記録、児童生徒等の感想を**収集**しておく。	■評価のための補助資料の収集 実践 評価のための資料収集		
3月以前 春季休業前	⑲ ＝新1	「（前年度）３月前後」「７月」「12月」に実施したものと**同じ（相当の）調査票を用いた調査**を実施する。	■質問紙調査実施（４回目）	E（＝P）	
	⑳ ＝新2	「３月前後」に実施した**調査結果**に基づき、学年ごとの１～３月の取組を**検討・評価**する。	■検討・評価 ■調査結果 ■補助資料 	E	第４サイクル
	新3	「３月前後」に実施した**調査結果**に基づいて**話合い**を行い、**学年ごとの重点課題**を明らかにする。	■学年団全員での話合い		